

コンセプトという、昨今では否定的に語られることが多い。むしろ絵画や彫刻で重要なのは、素材であり、仕草であり、観念を超えてしまうような出来事だというわけである。

ここで勘違いしやすいのは、これをすぐさま、美術＝もの(素材)を考えてしまうことにある。たとえば、素材を生かすとか。

観念を超え出るにせよ、素材を生かすにせよ、それが起りうるのは当の観念との関係なしにはありえない。つまり観念を超え出るというのは、観念(概念)があらたに作り直されることにはほかならないし、素材を生かすというのも、素材の捉え方が組み直されることと言い換えられる。

つまり観念論を批判するとき、批判されたのは、先験的に存在するかのような観念だったのだ。

美術作品を作ること、見ることの楽しさは、ひとたびこちら側の概念が分解されて(言い換えれば、感覚を通して入ってくる多極的な印象がひとつの像としての知覚を困難にさせて)、あらためて、その分裂した印象がひとつに組み立てられていくという過程にある。

作品が完成するという実感は、ある意味で頭の中の混乱が安定に近づいたということかもしれない。つまり作品を作ることは概念を作ることと同義であるのだ。

この概念は頭の中で純粋に作られるのではなく、作品という外的な素材とのやりとりを通して形成されるのであった。そして、その概念を形成する当の素材が頭の外にある以上、ひとたび完成したと思われた概念も、あらたに見直すそのたびに修正、時に崩壊をまぬがれえない。また逆に物理的な存在としての作品が実際に破損したりしたとしても、頭の中に形成される作品像はその物理的な破損を自動的に修正してしまう。つまり破損した断片からでも全体像を把握する力を持っている。

いずれにせよ、もっとも重要に思えるのは、このように不可避的に分裂し、断片化してばらばらにあるほかない、われわれの知覚でできる世界と、その分裂した断片を乗り越えるようにひとつに結び合わせていく作業を、われわれの頭脳が不断に行ないつづけているという事実である。

岡崎 乾二郎

■ 岡崎 乾二郎 プロフィール

1955 東京に生まれる

1977 多摩美術大学彫刻科中退

1979 Bゼミschool修了

EXHIBITION

1978 Bゼミ展

1979 Bゼミ展

1981 個展

今日の作家 展
第2回 “ハラ・アニユアル”

1982 個展

「現代美術の最前線」
平行芸術展

第12回 パリ・ビエンナーレ
パリ・ビエンナーレ選抜巡回展

2人展

現代日本美術の展望「立体造形」展
今日の作家 展

1984 個展

個展(山脇一夫氏企画「空間の詩学」)
個展

「内面化される構造2」
「迂回のパッサージュ」

グラスアート赤坂内装制作(設計 磯崎 新)

1985 個展

「迂回のパッサージュ」
個展

1986 個展

Asian Cultural Council の奨学金により渡米(1986年4月～1987年1月)

PUBLICATION

1984 『素人のためのデュシャン』現代詩手帖7月号

1984 『現実について』風のぼら

1984 『過去の生産』現代詩手帖9月号(特集・モダニズムの現在性)

1984 『ドイツ芸術固有の力学』展覧会・現代ドイツ美術展 美術手帖11月号

1985 『見ることの奇跡』美術手帖1月号(特集・現代美術の問題点 新しきの神話)

1985 『現代美術にとっての場所』美術ノートNo.3

1985 『掌の上の雲』美術手帖6月号

1985 『333からトビウツレ』現代詩手帖10月号(特集・超-コミック)

1985 『認識の三重苦』現代詩手帖ロラン・バルト 増刊号

PUBLIC COLLECTION

大原美術館 「まだ早いが遅くなる」1986

富山県立近代美術館 「川に水を運ぶ」1986

金井現代美術館 「おちまち」1986

兵庫県立近代美術館 「亜鉛」1985 - 山村コレクション -

横浜市民ギャラリー

横浜市民ギャラリー

村松画廊

横浜市民ギャラリー
原美術館

村松画廊

画廊パレルゴン
小原流会館

パリ市立美術館

画廊パレルゴン

富山県立近代美術館
横浜市民ギャラリー

スタジオ4F RooF

Rギャラリー
お茶の水画廊

セントラル美術館
淡路町画廊

AND Oギャラリー

山口県立美術館
南天子画廊

横浜

横浜

東京

横浜

東京

東京

パリ

ヘルシンキ

オスロ

東京

富山

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

東京

TAKUMI ART NEWS

制作発行：画廊 匠 1987年6月6日 No.14 画廊 匠 宜野湾市大山312番地
Phone 09889(7)7981

87企画—5 岡崎 乾二郎 展 6月6日(土)—7月5日(日) (月曜休廊)

GALLERY TAKUMI



作品マケット 1987

観念の造形

翁長 直樹

'82年の春、岡崎乾二郎の個展を初めて村松画廊で見たとき、実に自由で、見ることの楽しみを経験したことを昨日のように覚えている。小さな、まるで一枚の板材から切り抜いた様々な面を組み合わせたかに見える作品は、いかにも軽やかで、画廊の壁面にすっと止まっているようで、ある種のなつかしさを覚えた。

そのなつかしさがどこから来るのかわからなかったが、東京での生活に息苦しさを感じていた頃なので、「東京でもこんなに自由で軽やかな作品を作る人がいるのか」と変に感動したものである。

岡崎の作品は作者によれば、「歩きまわってみたくなる」ように作られていて、レリーフを構成する各面が、空間を切り分け、包み込み、「不連続であるが、連続し、閉じていながら開いているような、境界線が流動的であるように」意図されている。素材は、ポリスチレンやアルミ、ベニヤ、紙など軽くてどこでも手に入れられるものがほとんどで、それを、道具で切ったり、手で破いたり、曲げたりして接着剤や、ホッチキス、その他で固定する。要するに、素材や技法にはさほどこだわらないのである。

それはずっと変わらない岡崎の制作方法と言えるだろう。岡崎にとって制作とは、「素材とのやりとりを通して概念を形成すること」であり、昨今流行のニューウェイブといわれる作品群のような、物に寄りかかった表現とは異なり、どちらかといえば、概念性の強いものである。人の頭位の大きさのレリーフは、村松画廊の空間の中では異常に小さく見えたが、観者との距離のとり方で、「物理的には小さいけど、視覚的には大きい、見るたびの視野がそのまま、作品

の限界になり、しかも視野へ解消してしまうのではなく、逆に視野を決定し、はっきりとした実在感のある作品」という作者の意図は成功していたようだ。

岡崎の作品の面白さは、誰もが作れそうでどこにもありそうでいながら、その実、岡崎にしか作れない、我々の記憶をくすぐりつつしっかりと彼自身のオリジナリティを備えていることである。彼の作品は、マチスやブランクーシを連想させるし、限られた素材やはっきりしたコンセプトは、ミニマルやコンセプチュアルアートを踏まえた仕事も感じさせる。それに小学校の図工の時間に夢中になって作った工作の記憶も思い出させる。つまり、思考と感性がしっかり結びついて自在なのだ。彼の作品の豊かさは、「岡崎自身の装置の豊かさ」(難波英夫・西武美術館学芸員)である。事実、岡崎との対話は、僕にとって実に刺激的で、いつでも自分の中の制度性や自己の世界の小ささを思い知らされ、尚かつ開かれた壮大な宇宙を魔術的、鮮やかな手わざで目の前に広げられる思いのする体験である。

岡崎によれば、我々の知覚機能から考えれば、すべての芸術作品は差異よりも共通する要素が多く、様々なイメージの断片が、我々の知覚(視覚)に入ってきて、それが統合されることがすなわち理解されることであるという。形式というのは、どちらかと言えば理解のされ方であるというのである。そのような考え方からすると、美術における彫刻とか絵画というジャンルが大して意味を持たないばかりか、文学や映画、漫画etc.なども同等であろう。実際、岡崎がひとつの作品について語るとき、その語りの豊かさは、ひとつの作品を飛び越して人間の作るあらゆるものに及び、世界の中の作品というものが浮かび上がってくるほどだ。

岡崎乾二郎は自分の作品を評してモダニズムであるという。その言葉には様々な意味が含まれているようだ。昨今のポストモダンの風潮に、自ら「構築」でもって答えようとする意図と、物と物との関係性だけに流され、曖昧さを良しとする芸術に概念(観念)を再検証し、対置させようという意図であろう。

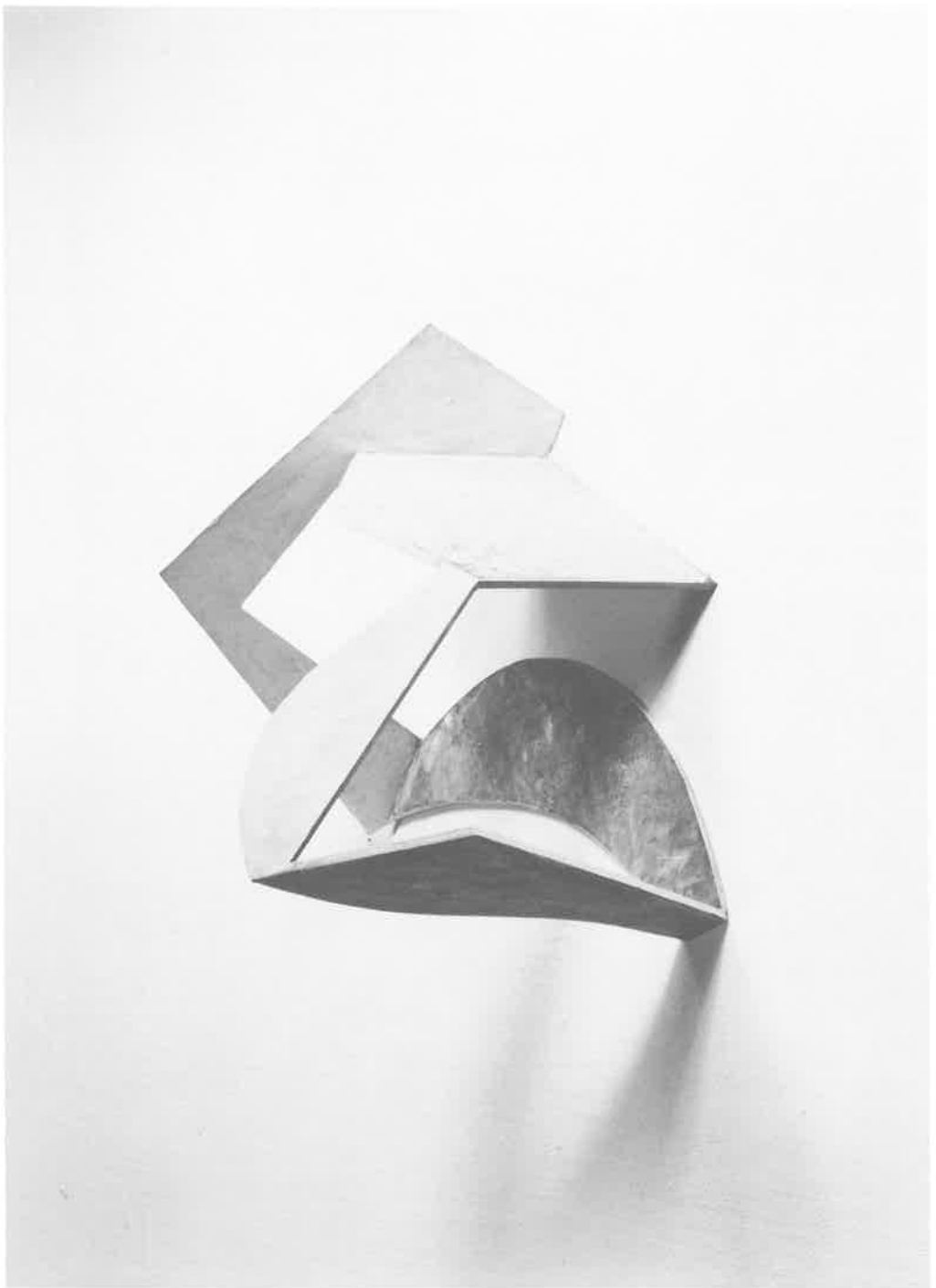


photo by Y. Uchida

889-4353 1982 34.5×30.0×26.0cm